

## 十帖源氏攷

四八

中西健治

## はじめに

自著十帖源氏の評判が高くなると共にこれを真の源氏物語と思ひ込むという著者の意図せざる事態に發展することを懸念し、日ならずして改めて作り直し、これこそ婦女子のための源氏物語よと喧伝するおさな源氏の自序は次のようである。

此名たかき物語のすたらをかたのことくつゝめて書つゝ代々の哥人  
 さえ大事とつたへをかれたるまきくをうはのそらに見わくへきな  
 らねばかすくのうそにかたことをとりましへておさな源氏と名付  
 たり<sup>①</sup>

五十四帖の源氏物語の実体をよく知らぬ者には真の源氏物語と思わせるにふさわしいような分量と文言を十帖源氏が擁していたのではと推測し、原作には遠く及ばぬ分量ではありながらも、その錯覚を生ぜしめるに至つた主たる要因の一は雅な語句の綴り合わせに幻惑されることにあるのではなかつたのかと、原作と十帖源氏双方の文章を比較対照させる作業から、その推測の妥当性を検証しておこう。いま、桐壺巻の冒頭を出しておく。上段が原作、下段が十帖源氏で、文言の重なる箇所に傍線を付すと次のようになる。

いつれの御時にか、女御、更衣あ  
 またさぶらひ給ひける中に、いと  
 やんごとなき際にはあらぬがすぐ  
 れてときめき給ふ有けり。はじめ  
 より我はと思ひ上がりたまへる御  
 方ぐ、めざましき物におとしめ  
 そねみ給ふ。同じ程、それよりげ  
 らうの更衣たちはまして安から  
 ず。朝夕の宮仕へにつけても人の  
 心をのみ動かし、うらみを負ふ積  
 りにやありけむ、いとあづしくな  
 りゆき物心ほそげに里がちなる  
 を、いよくあかずあはれなる物  
 に思ほして、人の譏りをもえ憚ら  
 せ給はず、世のためしにも成ぬべ  
 き御もてなしなり。<sup>②</sup>

いつれの御時にか女御かつるあま  
 たさぶらひ給ける中にいとやんご  
 となきにはあらぬがすぐれて  
 ときめき給ふありけり(いつれの  
 御時とは醍醐天皇をさしていへり  
 時めき給ふとはきりつほの更衣の事  
 也)梨壺<sup>照陽舎</sup> 桐壺<sup>源景舎</sup> 藤  
 壺<sup>飛香舎</sup> 梅壺<sup>凝花舎</sup> 雷鳴壺<sup>豊芳舎</sup>  
 此きりつほにすみ給ふかうぬを  
 御てうあひあれはきりつほのみか  
 とゝも申也あまたの女御かうぬそ  
 ねみてあさゆふの御みやつかへに  
 つけても心をのみうこかしうらみ  
 ををふつもりにやあつしく成ゆき  
 (をもき病也)物心ほそげに里か  
 ちなるをみかといよくあはれに  
 おほして人のそしりをもえはくか  
 らせ給はず<sup>③</sup>

物語全体の冒頭故の状況設定描写の必要からくる文章の重なりは当然のことではあり、また十帖源氏の側に多少の注釈的言辞が織り込まれていることはやむを得ないこととして、それらを差し引くと、十帖源氏が原作本文を適当に摘み出していることが判然としよう。十帖源氏の依拠した本文は寛永頃に刊行された無跋無刊記本と言われていることから、原作と十帖源氏双方の本文をざっと対照する作業の過程で、立圍がその無跋無刊記の版本を傍らに置きつつ、これはと思う原文を摘録しているかのような姿を憶測させるに十分な検討結果が得られるのである。しかしながら、それでは十帖源氏の著者野々口立圍は単なる摘録のみをこととしていたのだろうか。松永貞徳門下の重鎮として正統な源氏学の伝授を受けた者が、摘録でことを終わらせるわけがないとは予想できることであって、原文を陰画として具体的にいかなる所にいかなる手法がはめ込まれているのであろうか。それを考察することは源氏物語享受の相を具体的に把握するために必須の課題であらう。

### 一 摘録の方法

清水婦久子氏は『十帖源氏』『おさな源氏』の本文 歌書としての版本「と題する最近の論考」の中で、十帖源氏の本文の特徴を「要約の方法」という章を設けて次のようにまとめられている。

- ① 本文の改変を極力避け、複雑な部分を削ることによって縮小化を図っている。
- ② 物語を複雑にしている心情描写などを省くことでストーリーが自然に流れるようにし、わかりやすい文章にしている。
- ③ 本文の特徴は挿絵画面に反映させている。

- ④ 和歌に関わらない所を集中的に削除し、和歌を残しつつ全体の五分の一に縮小している。

さきに示した十帖源氏の摘録の姿勢こそは清水氏の指摘される①②に重なるものであるが、子細にみれば、例えば原作にある修飾句を削除したり、曖昧な表現に説明を加えたり、主語を明示したり、さらには文章の組み替えを行うなど、さまざま工夫を凝らしていることが読みとれ、原作をただ単純に抽出していくのではなくて、作品を的確に解釈したうえで摘録であったことがわかる。

玉かつらを源の御むすめとおほして君たちにももしさやうの名のりする人あらはみくとよめよなどの給ふ (蜷・五・二〇オ)

内大臣は玉鬘の評判を聞くにつけても、どこかに素晴らしい自分の娘がいるのではないかと思ひ子息たちに語る場面。原作には「玉かつらを源の御むすめとおほして」は無く、立圍が付加した注釈的な文言であり、これによって内大臣の焦燥の根拠が明らかになり、読解の便宜が図られることになる。このような例は多い。いま十帖源氏・巻五の野分巻を例として目につくものだけを示すならば、「中将は【いま参りたるやうにこはづくりて】(二六オ・【内は十帖源氏にあつて原作にない文言。以下同じ】)【中宮のおまへには【わらはへおるさせて】(二六ウ・【源むらさきの上に【きのふ風のまぎれに】(二七ウ・【明石の上は【さうのこととをまさぐり】(同・【風にをちさせ給て【紫の御かたにおはします】とめのと申す】(二九オ・ウ・【すよりこひて【雲井の雁への御文かゝせ給ふ】(二九ウ・【御物かたりのついでに【今姫君(近江)の事】きこえ給ふ】(同)など、よりわかりやすい語句が補われている。これを示す

ことだけでも十帖源氏の本文の性格の一端は明らかになる。

少弐任はてゝのほりなんとするにをのこ子三人あるに此君(玉)を  
京にゐて奉りてさるへき人にもしらせ奉れといひて姫君十はかりの  
比少弐はうせぬ  
(玉鬘・五・二ウ)

少弐が困窮のため上京を躊躇っているうちに病を得て死にそうになり、玉鬘のことを不安に思つて子供たちに遺言をするという、新大系では十分の文章に相当する場面である。これを大弐の不安と遺言とを一緒にして語順を変え簡潔明瞭な一文としている。同じく玉鬘巻で、肥後の大夫監が玉鬘に求婚に来て勝手に四月二十日頃に訪問すると決める場面、原作には大夫監と乳母との贈答歌を巡つてのやりとり、乳母の子供たちの監への恐れ、筑紫からの脱出、そしてその後監が四月二十日頃と日を選んで来ようとしてること等々を、新大系では約二頁ほどの分量で記しているのを、十帖源氏では両者の贈答歌のあと、「(監詞)都の人とても何はかりかあらんあなづりそ四月廿日の程にむかへにこんといひてかへりぬふんこの介と兵部の君といふむすめそひてよるにげて舟にのりけり」(四オ)と、物語の展開の大筋のみを原作の叙述順を無視し、登場人物の動揺する内面描写をすべて摘録の対象から除外したうえで簡潔に縮約摘記している。これは清水氏が指摘された④に該当するところで、十帖源氏があえて摘録の対象としなかつた場面がいかなる箇所であるのか、そしてその分量がいかに多いものであるのかも実証することにつながる。

## 二 巻々の冒頭箇所への対応方法(その一)

物語が連綿として展開する形式である以上、いわば重要な導入箇所と

しての巻の冒頭表現には、読者を即座に捕捉する効果が期待される性格があり、その意味できわめて注目されるものでもある。したがって源氏物語の各巻の冒頭表現が十帖源氏ではどのように吸収され置換されているかを検討することは重要であり、そこから立圃の創作意図を窺うことは十分可能なことであろう。例えば先に引用した桐壺巻のように原作と全くの同文を冒頭に置く巻が他に花宴、明石の計三巻があるが、他は何らかの改変がなされているので、残りの五十一の巻々がどのような形式に改変されているかをみると、おおよそ次のように大別できようか。

A 基本的には原作の冒頭表現にほぼ沿ったかたちをとる (一七)

紅葉賀・絵合・松風・薄雲・朝顔・玉鬘・常夏・梅枝・柏木・横笛・鈴虫・匂宮・椎本・早蕨・浮舟・手習・夢浮橋

B 原作の冒頭表現を縮約、摘録など何らかの手を加える (二二)

空蝉・夕顔・若紫・末摘花・葵・榊・須磨・漣標・少女・胡蝶・野分・行幸・藤袴・真木柱・若菜上・夕霧・御法・幻・総角・宿木・蜻蛉

C 原作の冒頭表現と異なつて大幅に改変する (二三)

帚木・花散里・蓬生・関屋・初音・蛩・篝火・藤裏葉・若菜下・紅梅・竹河・橋姫・東屋

Aの絵合巻の冒頭は「前斎宮の御まいりの事、中宮の御心に入れてもよ

をしきこえ給ふ」とあるのに対して、十帖源氏は「前齋宮の入内の事入道の宮（藤壺中宮）御心に入てもよほし聞え給ふ」（三・四二才）とあって、「御まいりの事」とは冷泉帝の女御としての入内を意味するもので、十帖源氏が「入内の事」とするのはまったく正しく、また、「入道の宮」と称することも、新大系の脚注で「賢木巻の出家以降、須磨、明石、遷標巻では『入道の宮』と呼ばれたが、本巻では再び『中宮』の呼称が用いられる」と注されるように、十帖源氏の呼称が正しく、話の大筋が正確におさえられていると言えるのである。また、薄雲巻は原作には「冬になりゆくまゝに、川づらの住まいいと心ばそさまさりて、うはの空なる心ちのみしつゝ明かし暮らすを……」とある箇所、十帖源氏では、「明石の上は冬に成ゆくまゝに川づらのすまめは心ほそし」（四・六ウ）と主語を明示し、物語の状況を明瞭にさせている。同様な例は梅枝巻で「明石の姫君十二才御もぎの事おほしそく」（六・二才）と、原作に主語を付加した冒頭になっている。その一方で、早蕨巻のように原作冒頭には、「敷しわかねば」と、宇治にも京にも差別無く日の光がさしこんでいるということ、古今集巻十七・雑上・布留今道・八七〇「日の光敷し分かねば石上ふりにし里に花もさきけり」の第二句を引用して叙情的に表現しているところを、十帖源氏は「中宮は春のひかりを見給ふにもいかてかくなからへけると夢のやうにのみおほえ給ふ」（九・二才）と平易な表現に置き換えている。物語の中の和歌を全部収載しようとし、物語の和歌的世界を重視する立圃であれば、むしろ和歌引用を劈頭に据える雅やかな叙述の巻をこそ歓迎すべきなのであるが、それは無視され、代わりに主語が記されている。十帖源氏は清水氏も指摘されるように、歌書としての側面を濃厚に持つものではあるが、それは物語中の作中人物が詠んだ和歌を一義的に再確認し印象づけるものであって、早蕨巻のような特別な語り出しはおよそ一般的でない判断して避け、平易

な表現に改め換えられたように、原作の地の文における引用和歌や歌語表現などにはさほどの関心がなかったのではないかと思われるのである。摘録にあたって立圃は、物語の筋は筋、和歌は和歌と、一線を画する理解をしたうえで記述する手法をとっていたのではあるまいか。さればこそ、巻によっては和歌のみが連なっているだけで、何とも不自然に見える背景の一端も明らかになってくるはずである。

### 三 巻々の冒頭箇所への対応方法（その二）

十帖源氏の縮約・摘録という手法をもっともよく示すBも、Aと内容的には通つところもあるが、Aが原作の冒頭文とほぼ等量であるのに対し、Bはかなりの差がある点で異なっている。十帖源氏の空蟬巻の冒頭は「源は寝られ給はず小君も涙をこぼしてふしたり」（一・二六才）とあるのに対し、原作では、「寝られたまはぬまゝには、『我はかく人にくまれてもならはぬを、こよひなむはじめてうしと世を思ひ知りぬれば、はづかしくてながらふまじつこそ思ひなりぬれ』などのたまへば、涙をさへこぼして臥したり」とあって、この一文の前後の語句に主語を付したのが十帖源氏の冒頭であるとわかる。十帖源氏・夕顔巻の「同じき年の夏六条の御休所へしのひてかよひ給ふ中やとりに源のめのと惟光が母いたくわつらひてあまに成たるをとふらはんとて五条なる家におはしたり」（二・二才）は原作にない時期の記述、大貳の乳母についての系譜的説明を加えている。原作の記述にない時期を冒頭に記す例は他に若紫巻（源十七才の春わらはやみにわつらひ給て「一・一七才）もあり、また、須磨巻冒頭の「世の中いとわづらはしくはしたなきことのみまされば」とあるのを、十帖源氏では「藤つほの御事かんの君密通などにつけて世の中わつらはしくおほす」（三・一才）と原作の文言に対する立圃の解釈

を敷衍し具体的説明を記すことから巻を起す例もある。十帖源氏・末摘花巻の冒頭は、「夕かほの上の事おほしわすれす」(二・二五オ)ときわめて簡潔な表現で記している、原作にある亡き夕顔への源氏の尽きることのない執着の記述を、さらにその核心のみを抽出することで鮮明化させていよう。Aとして分類している玉鬘巻にも同じような冒頭表現があり、「年月へたゝりぬれと夕かほの事わすれ給はず」(五・二オ)、夕顔につながる巻であることを明示しようとしている。総角巻の冒頭は「あまた年耳馴れたまひにし川風も、この秋はいとはしたなくものがなくて、御はての事いそがせたまふ」とあるのに対し、十帖源氏は「姫君たち此秋は物かなしく宮の御はての事共中納言殿あざりも参給てつかまつり給ふ」(八・二二オ)とあり、「姫君たち」「中納言殿」という主語を提示している。

このように冒頭表現に関して原作と十帖源氏とを比較対照させてみると、概ね原作の表現を踏襲しようとしているABに分類される各巻からは、十帖源氏が主語を明瞭にしつつ説明的あるいは解釈的文言を付加することによってより平易で簡潔な再構成を試みていることが読みとれよう。もちろん作中和歌については別扱いである。

#### 四 巻々の冒頭箇所への対応方法(その三)

ところで、巻全体としてみればほとんど変わりない手法で梗概化されてはいるものの、この冒頭表現だけをみるならばAにもBにも属さない巻が十三もあることは注目に値しよう。立圃としてはどのようなかたちで巻を起筆するかは何と言っても大きな関心事であったはずであった。例えば帚木巻冒頭は、「筆記編集する作者が、語る古女房を『ものいひさがなし』と批評」<sup>10)</sup>する一文とそれに続く源氏その人の批評の一文、

「光源氏名のみことくしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとゞかゝるすぎことどもを末の世に聞き伝へて、かるびたる名をや流さむと忍び給ける隠るへことをさへ語り伝へけむ、人のもの言ひさがなさよ。さるは、いといたく世を憚りまめだち給けるほど、なよびかにをかしきはなくて、交野の少将には笑はれ給けむかし」とあるのに一切触れず、「源は藤つほに御心さしあれば」(一・一〇オ)という原文に見られない語句から始めている。帚木、空蝉、夕顔の三帖は帚木の並びの巻として一括りの内容であることは周知のことであるが、立圃が採ったのは藤壺への秘めたる思いのせいで左大臣邸への通いが間遠になっていたと解釈を冒頭に置き、十帖源氏・桐壺巻の末尾「おとなになり給てのちは・・・内すみのみこましようおほえ給ふ」に直結するように仕立てたのであった。従って帚木巻冒頭を受ける形の夕顔巻末尾である「かやうのくだくしき事は、あながちに隠るへ忍び給しをもしくて」以下の文言も十帖源氏には、当然採られていない。これと同様な例は竹河巻においても見られる。つまり原作の巻頭に新大系で五行にわたって記されるいわゆる語り手の前口上に相当する記述を十帖源氏は一切無視して、「玉かつらの内侍のかみの御はらにおとこ三人女一人おはしける」と起筆したのである。先も見たように、十帖源氏の方法としては物語における主語、あるいは人物を明示し、その動静を記述することこそ主たる関心事の一つであった。したがって原作にある総括的な、あるいは修辭的に凝った冒頭表現はむしろ梗概化の対象としては馴染まないものであったようである。「れいけいてんは宮たちもおはせず」(花散里)、「末つむは源をまちつけ給ふ」(蓬生)、「源須磨よりかへり給て」(関屋)、「玉かつらはおとこの思ひのほかなる」(螢)、「八の宮はおほやけわたくしにより所なく」(橋姫)、「ひたちのかみの子とももとばら此はら五六人ある中に」(東屋)などの冒頭文は、いずれも帚木巻・竹河巻と同様

に、まずはいかなる人物がどうあるのかということをも巻の最初に確定する方法を採ろうとしていることを明確に示しているのである。また、中には紅梅巻のように、原作では「その比、按察大納言と聞こゆるは、故致仕のおとゞの次郎なり、亡せ給にし右衛門督のさしつぎよ、・・・」という唐突な系譜の紹介で始まっているところを、十帖源氏では「按察大納言」に焦点をあてて、「ひけくろのおほきおとゞの御むすめまきはしらの君は故蚩兵部卿の宮にあはせ姫君一人まうけ給へりしを宮うせ給て後故ちしのおとゞの二郎君あぜちの大納言」と、今まで馴染みのあつた鬚黒大将なり真木柱なりの人物を語りだして、その人物と関係させることでわかりやすく説明しようとしている。立圃の思案は、まずは物語における人物がいかにあり、どのような行動をとるのかという点をより鮮明にすることに關心の中心があつたと読みとらざるをえないのである。

## 五 野々口立圃の關心

十帖源氏の挿画の特徴は「俳人・雜人形師としての立圃の特性を反映し、生き生きと動きのある表情と人物を描く俳画の技法」にあり、「大衆向け版本ゆえに、古来の伝統的図様に縛られない自由な画面」が展開されていると清水氏が指摘されていることは肯綮にあたるものである。その俳人・雜人形師としての意識は当然、原文摘録の際にも反映されている。末摘花巻の末尾、源氏が難遊びをしている紫上の許を訪れる場面、「むむらさぎの上のかたへおはしてひいなあそひゑなとかきていろどりかみのなかき女をかきて」(二・二九ウ)はいかにも漏らすことなく、また、服飾記事への関心も積極的に取り込んで描いている。服飾記事といえはまず玉鬘巻のいわゆる衣配りの場面であろう。十帖源氏では「恋ひわたる」の歌から次の「来てみれば」までの十一行(正確には「来てみれば」

の歌の二行後まで)はすべて配られた衣裳の記述に終始していること、他、夕霧が玉鬘を垣間見する条の玉鬘の衣裳、玉鬘の装着への贈り物などは原作本文にかなり忠実に従っていて、立圃の關心の在り所が那邊にあるかが窺われるものでもある。

立圃は俳人であつた。というよりも三条西家につながる正統の源氏学(九条植通 松永貞徳 野々口立圃)を継承する人物のひとりでもあつたのであつて、そのことは同時に歌人としても大いに重きをなす位置にいる人物でもあつたことを意味する。十帖源氏が歌書として享受されていたということも一方の重要な性格を表すものである。源氏物語所収和歌の全てをそのまま採ることが大前提となつていること自体がそのことを裏付けており、物語の梗概を説くと同時に、物語中の和歌をも知らしめるものであつた。「代々の哥人さえ大事とつたへをかれたる」物語としての源氏物語を「おとなに成てもまことのたより」とすべきものであると自著、おさな源氏の序に記したのは、七年前(承応三年)に既に跋文を書き上げていながらようやく刊行された十帖源氏と時を同じくする寛文元年(一六六一)であつて、韜晦した表現の裡に立圃周辺の人々の間に広まっていた十帖源氏への高い評価に支えられた自信の程が窺え、十帖源氏の方法に確固たる矜持を獲得したのではないかと思われる。「俳諧修学のためには古典文学を習得する必要を感じ、古典中心主義を採つて来た人」としての立圃の執念が二つの梗概書に結実したのである。その中核が両書共に全和歌を収載し、画を添えるという方法となつて表れたのである。画の問題については機を改めて述べることにし、ここでは和歌について、二言及しておきたい。

十帖源氏が物語中の全和歌を収載することを初発からめざしていたこ

とは明らかであり、これはおさな源氏にも踏襲されている。ということ  
 は、物語の梗概化をめざした十帖源氏をさらに平易なために圧縮した  
 おさな源氏にとっては、全和歌を収める方針をとる以上、作品全体に対  
 して和歌の占める割合が十帖源氏よりも格段に大きくなり、そのために  
 和歌の背景や和歌と和歌のつながりなどが不鮮明にならざるをえない。  
 『おさな源氏』は一見、『十帖源氏』を叩き台とした改作とも見られよ  
 うが、述作の目的は一般庶民の婦女子にわかり易く書き改めようと、立  
 圃の創作力を働かせて書いたものであるだけに、自然と作品としての性  
 格が、改作の意識を超越した文学的草子とも見られる作品になったもの  
 と思われる。<sup>⑭</sup>と言われるが、「ことと和歌に関して言うならば、十帖源氏  
 よりも多くの比率で和歌を採り入れ、一見何の脈絡もなく和歌が列挙し  
 てあるように見える箇所からは必ずしも「文学的草子」とは言い難く、  
 むしろやや縁遠いもののようにも見られるのである。そのことは十帖源  
 氏についても同様なことが言えるように思われる。例えば、原作巻末が  
 和歌では終わっていないにもかかわらず、和歌を引用する形式で巻の梗  
 概の結末としているものがある。余韻を残す形式、あるいは歌物語の形  
 式を採っているとは言えるのであるが、原作の形式を変更していること  
 は立圃が作品構成を自身の作品としていかに再構成するかの方法意識の  
 反映に異ならないはずである。十帖源氏の巻末を和歌を掲げる形で終わ  
 っている巻は、空蝉巻<sup>⑮</sup>、夕顔巻、若紫巻、末摘花巻、紅葉賀巻、花宴巻、  
 葵巻、花散里巻、薄雲巻、朝顔巻、藤袴巻、真木柱巻、梅枝巻、若菜上  
 巻、夕霧巻、幻巻、東屋巻、蜻蛉巻の十八巻である。これがおさな源氏  
 になると、さきの巻々に帚木巻、明石巻、胡蝶巻、常夏巻、篝火巻、野  
 分巻、藤裏葉巻、柏木巻、鈴虫巻、御法巻、竹河巻、総角巻、早蕨巻、  
 浮舟巻の十四巻が加わって三十二巻となり、さらにはそのうちの十八巻  
 が贈答歌を巻末に置く形式を採っているのである。立圃が源氏物語の和

歌を特段に意識して巧妙に構成引用して歌物語的形式にしてはいるもの  
 の、単独にこれらの作品を読む限りにおいてはなかなか充足した読解は  
 期待できないのではなからうか。もちろん十帖源氏・紅葉賀巻末の歌の  
 後、新皇子の素晴らしい容貌に触れる記事、藤袴巻末の玉鬘の歌の後に  
 付された男たちの恋煩いの総括的言辞などを除けば、十帖源氏の末尾が  
 歌になっている巻は原作自体が巻末、あるいは末尾近くが歌で終わるよ  
 うになっていることもあるにはあったのである。しかしながら、例えば  
 四首の歌がある花散里巻のように、四首目の歌の後に描かれている麗景  
 殿女御の妹君である花散里との逢瀬を十帖源氏もおさな源氏も言及して  
 いないのは原作と乖離した省略と言えよう。いずれにしても作中歌を重  
 視することによるいびつな梗概化現象の生じていることは事実である。

歌物語的な形式をとろうとしている十帖源氏やおさな源氏であればこ  
 そ、その主たる生命線は和歌そのものにあり、しかも原作の全和歌収載  
 をこころがけている編集方針からすれば、和歌の詞には当然神経が注が  
 れているはずではあるうし、清水氏がおさな源氏について、「原文と異  
 なることはも見られるが、和歌は原文通りに掲載し」、「(松会版おさな源  
 氏の「筆者注」)和歌は地の文と別に一行書きですべて掲載し、本文も歌  
 数も初版の『十帖源氏』と変わらない<sup>⑯</sup>」と述べておられることも傾聴に  
 値する指摘であろう。いま立圃自筆のおさな源氏の本文の確認をする余  
 裕をもたないまま述べるのは慚愧に堪えないところであるが、現在容易  
 に知り得る資料<sup>⑰</sup>から見る限りにおいては、清水氏の御見解に若干の修正  
 を付加し得る点もある。たとえば、松会開版のおさな源氏の和歌表記形  
 式は、宿木巻の末尾(巻九・十八オ・ウ)の「すべらきの」、「よるづよを」、  
 「きみがため」、「よのつねの」の四首(十八オ)、「かほどりの」の一首  
 (十八ウ)についての表記は十帖源氏と同じく和歌のみ独立した二行書き

になっていること、また、和歌の数については、おさな源氏が十帖源氏に比べて三首少ないこと、つまり、夕霧巻の「いづれとか」、竹河巻の「竹河の」「流れての」の、計三首がおさな源氏には見当たらないということなどである。おさな源氏が十帖源氏の和歌に注目しておればこのような過誤は防げたことであろう。和歌本文についても両者は密接な関係にあるものの、なお、若干の異同があり、立圃が前作の十帖源氏の和歌をおさな源氏に忠実に引き写そうとしたのか、あるいは自分の記憶に頼ったこともあつたのかとも疑わせるような箇所もある。

### おわりに

十帖源氏を原作と照合する作業からあらと述べたのであるが、十帖源氏そのものを一作品として分析することを今後の課題としておくとして、まずは十帖源氏のめざしたところは原作の叙情的な場面を絵と共に簡潔平易に提供することであつた。守随憲治氏は「古典源氏物語が近世の庶民社会に享入れられた方法は、直接原典に依る外に、筋書式の十帖源氏とか小鏡とか忍草とかいふ類の頒布が相当強力に働いてゐたと思はれる。」<sup>19</sup>と述べておられる。その中でも物語の内容を適正にまとめた書物としては北村湖春の源氏忍草がもっとも優れているように思われる。ただ、絵を取り入れていなかった忍草が、元禄初年頃に完成しながらも刊行されたのはその約五十年後の天保五年の一回きりのことである。その間は細々と書写されていったのに比べ、上方版と江戸版とで数回の刊行をみた十帖源氏、おさな源氏<sup>21</sup>や多くの版や写本が現存する源氏小鏡の類は、源氏忍草に比してより深い反響をもたらしたと思つのである。十帖源氏が作品として成功をかちえたのは、出版という点からも裏付けられよう。

### 注

- ① 中野幸一氏編『源氏物語資料影印集成 10』所収、五頁。
- ② 新日本古典文学大系による。以下、源氏物語の本文は本書を使用する。
- ③ 野々口立圃自筆版下本複製の古典文庫による。上・七、八頁。
- ④ 清水婦久子氏『十帖源氏』『おさな源氏』の本文 歌書としての版本「文学」二〇〇三年七・八月号)
- ⑤ 木村三四吾氏「野々口立圃」(『俳句講座2』所収)など。立圃に関する資料は松尾真知子氏「野々口立圃研究文献目録稿」(『大阪俳文学研究会報』第三十一号)に詳しい。
- ⑥ 注④に同じ。
- ⑦ 中野幸一氏編『源氏物語資料影印集成 11・12』所収によって、巻名、巻数、丁数、表裏を示す。
- ⑧ 注②に同じ。(二)一六八頁。
- ⑨ 注④に同じ。
- ⑩ 玉上琢彌氏『源氏物語評釈』(一)一五七頁。
- ⑪ 注④に同じ。
- ⑫ 注⑤に同じ。
- ⑬ 吉田幸一氏『絵入源氏物語考 上』二二二頁。
- ⑭ 注⑬に同じ。
- ⑮ 立圃自筆本では和歌の左傍下に「是は伊勢か家の集の哥也」とあつて、本文とは別扱いをしているので、和歌を巻末に置いてみると解した。
- ⑯ 注④に同じ。
- ⑰ おさな源氏は近世文芸叢書(第七巻・擬物語)と近代日本文学大系(一)『仮名草子集』に活字化されている。前者は末尾に「松会開板」とあつて、いわゆる江戸版を底本としているようで、後者の底本は定かでないが、解題に「寛文十年板」とあるのを底本としてみると、これは上方本のようである。
- ⑱ 葵巻「くやしくも」の歌、十帖源氏は「くやしくも」とあるのに対しておさな源氏は「くやしくぞ」、朝顔巻「つれなさを」の第三句「こころこそ」は、十帖源氏が「こころにて」とあるのに対しておさな源氏は「こころこそ」、初音巻「ふるさとの」の初句、十帖源氏は「ふるさとの」、

おさな源氏は「ふるさとの」とあるなど。

①9 守随憲治氏「源氏物語と近世文学」(東京大学源氏物語研究会編『源氏物語講座 下巻』所収)

②0 拙著『平安末期物語攷』所収「第四章 物語の享受」参照。

②1 慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成(一)』(三)』によると、十帖源氏は寛文五(六)年、寛文十年、寛文十一年、延宝三年、天和元年、貞享二年、元禄五年、元禄九年、元禄十二年、宝永六年に、また、おさな源氏は寛文十年、寛文十一年、延宝三年、天和六年、貞享二年、元禄五年、元禄九年、元禄十二年、宝永六年、正徳五年に、それぞれ刊行されていることがわかる。

#### 付記

十帖源氏と書名にある本は他に寺本直彦氏が紹介された「後土御門院十帖源氏」や国会図書館蔵「十帖源氏」がある。前者は『源氏大鏡』の類ないしその周辺資料といわれるものの系列に属するものと思われる。(寺本直彦氏『源氏物語論考 古注釈・受容』四三七頁) 玉鬘とその并十帖にわたる一冊本であり、後者は源氏大鏡の二類本系統の五冊の写本である。

(相愛大学人文学部教授)